

## 中国から見た複数言語と日本研究

伊 東 貴 之

中国、更には、台湾を含む中国語圏における日本研究には、取り分け、日中国交回復後、かなりの蓄積があることは、論を俟たない。

まず、中国では、日文研とも何かと御縁の深い、北京日本学研究中心（センター）が最も有名であろう。夙に御高承の向きも多いかと思われるが、同・センターは、中国における日本語・日本研究の拠点として、また、日本との交流に携わる各分野の人材の養成を目的として、一九七九年、当時の大平正芳首相と華国鋒首相の合意により、翌八〇年に設立された日本語研修センター（通称・大平学校）の後継機関として、一九八五年に中国教育部（日本の文科省に相当）と日本の国際交流基金（ジャパン・フアウンデーション）との協議により開設されたもので、現在では、北京外国語大学に日本語学・日本文学・日本文化・日本社会・日本経済などを研究・教育する、総合的な大学院の修士課程・博士課程が設置されているほか、北京大学においても、主として、社会科学系の博士課程学生を対象とする講座が開講されている。何れも、適宜、日本人研究者を教授陣として一定期間、招聘したり、資料の収集や文献調査のために、学生たちが来日して研究する機会を設けたりしている。

北京日本学研究中心の学生たちは、日本語がきわめて堪能なことでもよく知られており、また、研究者や中国国内各地の日本語教師のみならず、官公庁や企業などで、実務に携わる若手

幹部の養成にも力を注いできた経緯もあって、日本側の協力とも相俟って、何れにしても、往事の日中友好的なムードや政策の反映であり、結実でもあるという側面が強い。

また、専門的な日本研究という点では、むしろ歴史も長いのは、周恩来首相のほか、ノーベル物理学賞の受賞者・李政道（リー・ジョンダオ）教授や楊振寧（ヤン・チェンニン）教授らの母校としても名高い、天津の南開大学であり、就中、同大に附設された日本研究院を逸してはならないであろう。同院は、夙に一九六〇年代より、同大の歴史研究所・日本史研究室、次いで、日本研究中心（センター）などを母体として、大学院レベルでは、中国国内で最も早くから研究・教育を展開しており、歴史、政治・外交、経済、思想・文化、社会・教育など、中国における人文系諸分野の日本研究のメッカとして有名である。日本語での著述も多い、日本史・日本思想史の故・王家驊（ワン・ジャーフア）教授など、著名な研究者を輩出している。

その他、現在では、中国社会科学院、清華大学、復旦大学、香港中文大学、吉林大学、東北師範大学、山東大学、浙江大學、四川大學など、各地の大学や社会科学院にも、日本研究の専攻や日本研究所が設置されるなど、制度的な整備の面でも、その進展には、著しいものがある。このうち、復旦大学の日本研究中心（センター）や歴史系の方々とは、日文研もつい先年、共催で第一八回・海外シンポジウム「江南文化と日本」（二〇一一年）を催したばかりである。

翻って、台湾の状況を概観するなら、やはり日本語・日本文学をはじめとする、日本研究の牙城としては、まず、教育・研究機関として、国立台湾大学・文學院の日本語文学系、他方、研究中心の機関としては、同じく台湾大学文學院に附設された日本研究中心（センター）や人文社会高等研究院に附属する日本・韓国研究平台（拠点・プラットフォーム）などが、代表的

な存在である。それぞれ先年、日文研の外国人客員研究員として滞在された、徐興慶（シュー・シンチン）教授が、その中心的なメンバーとして、研究・教育をリードされ、また、その設立にも携わってこられた経緯がある。

特に台湾大学・文学院の日本語文学系の場合、通常、多くの中国や台湾の大学の場合がそうであるように、外国語文学系の下位の組織ではなく、中国語文学系、外国語文学系、歴史学系、哲学系などと並列する専攻として、位置づけられていることが特筆されよう。京都大学から移籍された、日本思想史・教育思想史の辻本雅史教授をはじめ、数名の日本人スタッフも擁している。また、日本研究中心（センター）や人文社会高等研究院などは、取り分け、近年、さまざまなシンポジウムや出版活動を通じて、世界的なレヴェルでも、日本研究を牽引する存在となっている。

この他にも、教育機関としては、国立大学では、政治大学外国語文学院・日本語文学系、私立大学では、淡江大学外国語文学院・日本語文学系など、研究中心の機関として、国立中山大学・日本研究中心、輔仁大学外語学院・日本研究中心、淡江大学日本研究中心など、また、むしろ国際関係や社会科学系に重点を置く研究機関として、中華経済研究院・日本中心などがある。台湾大学と並ぶ、アカデミズムの牙城、中央研究院の亚太区域（アジア・太平洋地域）研究専題中心も、同様の傾向が見られるが、此方は、日本プロバターの研究所ではなく、目下、やはり日文研とも御縁の深い、中央研究院・近代史研究所の黄自進（フワン・ツーチン）教授らが中心となって、日本語プロバターの研究所を中央研究院のなかに設置すべく、尽力されている。まさに、こうした日本語教育や日本研究の蓄積の上に、現在、中国や台湾では、日本の同時代の文学作品や学術書なども、陸続と翻訳され、上梓されるに至っている。詳細は、曾て別稿

においても論じたところであるが（―拙稿「中国、モンゴルで『文学』を―カデンツァ風」、『國文學 解釈と教材の研究』第四七巻・第一〇号、學燈社、二〇〇二年八月号）、いわゆる村上春樹現象などに象徴されるように、取り分け、村上作品に関しては、殆どリアルタイムでの受容や享受が、海峽兩岸、ないしは、兩岸三地などと呼ばれる、大陸・台湾・香港を含む、中国語圏の全域で、広く深く滲透しているさまが見て取れる。

また、日本の中国研究など、学術書の翻訳出版という点では、大陸の方が、やや先んじているように見受けられる。特に江蘇人民出版社の海外中国研究叢書というシリーズが、英語圏を中心とする欧米の第一線の中国学の成果とともに、島田虔次、溝口雄三、斯波義信、吉川忠夫、濱下武志の諸氏ら、戦後日本の歴史学を中心とした中国研究の良質な達成を広く翻訳・紹介している。その他、中国での現代日本の学術書の翻訳・紹介の状況は、人文・社会科学に限ってみても、丸山眞男、廣松渉から、子安宣邦、蓮實重彦、柄谷行人など、中国学に止まらない広汎な裾がりを示している。

翻って、文学作品の翻訳では、島田雅彦、川上弘美、小川洋子の諸氏ら、中堅作家の作品から、ミステリーや歴史小説・時代小説の分野など、むしろ台湾の方が、日本語の読者層の厚みを感じさせる翻訳・紹介ぶりが注目される。他方、現代中国において、ほぼ完璧に近い全集や著作集が刊行されている作家として、上述した村上春樹のほか、中国を題材とした作品の多い井上靖やノーベル賞作家の大江健三郎などに加えて、何と渡辺淳一が挙げられるが、存外、彼の人気が高いこと、更には、谷崎や川端などの日本的な美意識の伝統を継ぐ作家として紹介され、喧伝されていることなどは、御愛敬とでも言うべきか。

それでは、こうした翻訳・紹介にも、如実に反映されている如く、中国や台湾における日本

語教育、日本研究は、日々隆盛を極めていると、手放して言祝ぐべき状況にあるのであろうか？―残念ながら、それを肯うには、些か遠く、むしろ懷疑や躊躇の念が、萌さざるを得ないのが現状であろう。

何も短い時間的なスパンでの、日中関係の齟齬や軋轢といったことだけが、問題なのではない。無論、現状のような事態が長引くなら、お互いの学術・文化の交流や日本学の進展にとつても、些か憂慮され、懸念される傾向が、深まる懼れも無しとしない。しかるに、取り敢えず、現時点までの中国なり、台湾なりの学界・アカデミズムや文壇・ジャーナリズムなどの趨勢を鑑みるに、取り分け近年、米国を中心とした欧米志向が一層深まり、日本の存在なり、日本の学術や文化の相対的な地位が、むしろ遁滅していることが、当面の問題なのである。上述したような、文学作品や人文・社会科学の翻訳・出版の盛況ぶりも、必ずしも日本研究の進展や深化の結果ばかりではなく、広く海外の学術や文化を紹介し、受容しようという意欲の現れの一環として、理解され、捉えられるべきであろう。何となれば、欧米の同時代の文学なり、ポスト・モダンの現代思想などの翻訳・紹介も、ある意味では、一層の隆盛ぶりを見せているとも言えるからである（―例えば、王前『中国が読んだ現代思想―サルトルからデリダ、シュミット、ロールズまで』、講談社選書メチエ、二〇一一、参照）。もつとも、社会科学や映画、サブカルチャーなどを視野に入れるなら、言うまでもなく、より大きな潮流は、文化的な意味でのアメリカン・グローバルイズムの席捲と見ることも出来る。

実際、聞くところでは、台湾においては、留学先による学閥的なグループ形成が見られ、曾ては、日本留学組が多数派であったのが、現在では、米国留学が主流化しつつあって、日本研究者としては、学術的な意味でも、そうした趨勢に対抗せざるを得ない状況に置かれている由

である。例えば、台湾の女性作家・李昂（リーアン）の作品（一例として、何れも国書刊行会から、邦訳もある『迷いの園』『自伝の小説』）などでは、戦中派の日本語・台湾語世代、戦後の北京語世代、そして英語世代とも言うべき、留学志向の孫の世代との葛藤などが、しばしば描かれているが、台湾の場合、より深いところでは、そうした世代間の言語的な断裂や社会変容の反映すらも、かかる事態の背景には、横たわっているのやも知れない。

さて、日本の存在感の相対的な低下という点では、憂慮すべきは、日本学のみならず、世界的な視野から見たとき、筆者が専門としている、中国学や中国研究、あるいは、東洋学の分野でも、同様の傾向が、かなり顕著に見受けられ、実感もされるところである。曾て日本の中国学、東洋学などは、「世界に冠たる」中国学、東洋学などとすら、呼称された時期さえある。インド学・仏教学の場合には、その近代化に当たって、ヨーロッパの言語学（サンسكريット学）などの多大な影響を受けた点で、やや異なるが、取り分け、中国学の場合、前近代以来の儒学・漢学の伝統に加えて、地政学的に見ても、さまざまな意味で、日本に有利な状況には事欠かなかった。戦後の長い期間にあっても、中国や台湾に比べて、日本の場合、大陸・台湾・欧米のそれぞれの中国研究に対して、比較的アクセスし易い状況下にあったことは、ある意味では、冷戦構造による、漁夫の利のような立場でもあった点は否めないものの、研究上からすれば、やはり僥倖と云うべきであつたらう。

しかるに、現在では、海峡兩岸の人的・学術的な交流の活発化はもとより、中国や台湾からも、米国を中心とする欧米留学が、かなり一般化している上に、特に戦後の米国における中国研究の進展、米国の中国学の国際的な擡頭といった事態とも相俟って、いわば日本の頭越しに、学術的な交流や人的な往来が行われるような傾向さえ、ごく普通に経験されるようになって

ている。

加えて、欧米の中国学、東洋学それ自体の変質という要因も大きい。欧米、特に米国において、歴史学部やアジア研究などの講座の中で、ポストや履修者の人数的にも、次第に日本学が占める割合が逡減し、些か国策的な意味合いも含めて、中国研究やイスラーム地域研究へと緩やかなシフトが敷かれていることが、夙に指摘されている。それと同時に、曾てまさに日本の中国学や東洋学が、「世界に冠たる」と形容された時期には、欧米のアカデミズムにおいては、中国学を研究するために、そのツールとして、わざわざ日本語を学ぶということも、むしろ一般的ですらあった。フランスのパリ大学では、漢文訓読なども教授されていた由である。現在でも、そうした伝統の名残として、筆者の知る限りでも、米国の中国思想史の泰斗、ベンジャミン・エルマン教授やフランスの仏教学の第一人者である、フレデリック・ジラル教授のように、日本語に堪能な方も少なからず存在するが、年代的には、やや片よりが見受けられるのも事実であろう。

以上、縷説してきたような事態を反映して、筆者なども近年、特に痛感するのは、中国や台湾で開催される国際シンポジウムや学会などの場で使用される、いわば共通言語や使用言語の変遷である。開催国が何処であれ、中国学や中国研究の場合、中国語が第一言語であるのは、余りにも当然のことであるが、日本学がその対象ではないにも拘わらず、曾ては日本語での発表に通訳が付くほか、場合によっては、日本語も併用されることさえ、ごく日常的な風景であった。それが最近では、呻吟しながらでも、やはり中国語で報告せざるを得ないケースが多くなる一方で、英語での発表には、必ずしも通訳も付かず、恰も英語が第二公用語のような情景すら、珍しいものではなくなりつつある。これまた、より広い背景や情況としては、ビジネ

スの世界や留学生同士の間では、東アジア出身の人びと同士が、場合によっては、英語を共通言語として会話し合うようなケースが、一般化・日常化しつつあるといった、いわば英語グローバルイズム（帝国主義？）の世界化とも、一面で平仄が合う事態ではある。

結論としては、些か凡庸かも知れないが、日本学と中国学や東洋学とを問わず、日本人研究者としては、英語や中国語など、多言語での発信により一層、心懸けると同時に、やはり本来の研究それ自体の精度を高めて、日本の学術が世界的にも参照されるような体制作りにも、意を用いるべきかと考えられる。

その他、最後になるが、中国から見た複数言語ということでは、中国域内の少数民族言語に加えて、普通話（プートンファ）（標準語）に止まらない、中国語（漢語）自体の方言の多様性なども、重要な論点となろう（―なお、少数民族の言語や文学などについて、御関心の向きは、やはり前掲の拙稿を参看されたい）。筆者自身、前任校では、初級の中国語の教育にも携わったが、普通話（プートンファ）ばかりではなく、会話人口の多さからすれば、広東語なども、もっと教えられ、学ばれても良い、実用言語としても、文化人類学などにおいても、きわめて重要な言語である。また、アジア地域の言語という点では、特に日本の場合、教育・研究上の観点からは、逆に必ずしも中国語だけで、それを代表させる必然性もなく、韓国語（韓国・朝鮮語）やヴェトナム語、インドネシア語など、より多様な言語が学ばれることが、文化の多様性の維持や拡充という意味からも、望ましいことと思われる。

（国際日本文化研究センター教授）